

## ボビー・フランクス殺人事件

1924年5月21日、共に裕福な家庭に生まれてシカゴ大学に通っていたネイサン・レオポルドとリチャード・ローブは、富裕なユダヤ人実業家の16才になる息子ボビー・フランクスを、言葉巧みにレンタカーに誘い込んで誘拐しました。互いに同性愛関係にあったレオポルドとローブはニーチェの超人思想の信奉者で、逮捕される恐れを一切感じることなく完全犯罪を成し遂げる力があると信じていました。

フランクスは、彫刻刀によって殴打された後、絞殺され、身元特定が困難になるよう顔と性器を塩酸で焼かれて、シカゴ郊外の線路の下にある排水路の中に投げ捨てられました。身代金目的の誘拐だと見せかけるために、1万ドルの身代金を要求するように偽装したタイプライターで打った脅迫状が送りつけられましたが、フランクスの父が身代金を払う前に、ポーランド移民のトニー・ミンキが排水路の中から死体を発見するという偶然が重なり、すべての計画が狂ってしまいました。

警察は、これが単なる身代金目的の誘拐ではないことを直ちに察知しました。フランクスの遺体のそばから真新しい読書用の眼鏡が発見されました。一見何の変哲もない眼鏡のように見えたが、この眼鏡の蝶番には特徴があって、アルマー・コウの眼鏡店で売られたものであることが判明しました。さらに、この特殊蝶番を使った同じフレームの眼鏡は、これまでに3個しか売られていませんでした。そのうちの1つの持ち主がレオポルドであり、その他の2つの持ち主はその眼鏡を手元に持っていました。レオポルドだけが「バード・ウォッチングをしている時に落とした」と主張しました。

身代金を要求する手紙を調べると、それはレオポルドが法学部のゼミで使っていたタイプライターで打たれた文字であることが判明しました。警察が取調べを重ねるうちに2人のアリバイは崩れ、ついに誘拐と殺害を自供しました。

ローブの家族が雇った弁護士・クラレンス・ダロウの奮闘の結果、2人は大方の予想を裏切って死刑判決を免れて、殺人罪に対して終身刑、誘拐罪に対して99年の懲役刑を受けました。

イリノイ州ジョリエット刑務所に収監された2人は、自らの受けた高等教育を善用して、刑務所の中の学校で囚人たちに授業を行いました。しかし1936年1月、ローブは服役者仲間のジェイムズ・デイにシャワー室で襲撃され、剃刀で切り殺されました。一方レオポルドは1958年、33年間の服役を経て仮釈放が認められて出所し、マスコミの取材攻勢を避けるためにプエルトリコへ移住し、花屋の未亡人と結婚して、1971年に66歳でこの世を去りました。

この事件は、ありきたりの誘拐事件とは全く違い、完全犯罪を遂行することで自分たちの優越性を立証しようという動機の異様さが話題を呼び、その後アルフレッド・ヒッチコック監督の映画『ローブ』（1948年）や、トム・ケイリン監督の『恍惚』（1992年）バーベット・シュローダー監督の『完全犯罪クラブ』（2002年）のモデルになりました。

さて、最後になぜこのボビー・フランクス殺人事件を「炉辺談話」に収録しようと考えたかについて、説明する必要があります。

この事件が解決する鍵となったのが、眼鏡商アルマー・コウの存在です。彼の協力なしにはこの事件は解決しなかったことは誰の眼にも明らかです。Almer Coe Optical Co.は当時のシカゴで一番大きな眼鏡

店であり、シカゴ・ロータリークラブの会員でもありました。当時シカゴ・ロータリークラブはシカゴ犯罪調査委員会を設立して、マフィアと対決しながら連邦警察に協力していた時期であり、この事件でもその解決の一翼を担ったものと言えます。ウェブで検索すると、現在もシカゴには **Almer Coe Optical Co.**が存在しますので、その後 80 年間営業を継続しているものと思われませんが、現在のオーナーがロータリアンであるかどうかは詳らかではありません。

2008.6.20